

トピックス 3 教室で代講をお願いしました

4月20日から27日までトルコに旅行してきましたので、各会の皆様にはご迷惑をおかけしましたが、この間以下のように代講をお願いしました。有難うございました。

東大島鶴の会 4月20日、27日 いつもお手伝いいただいている藤城弘子師範（瑞江鶴の会所属）にお願いしました。

瑞江鶴の会 4月24日 同会所属の宇留野良子師範にお願いしました。

亀戸SC会 4月24日 いつもお手伝いいただいている同会会員の諏訪やよひ師範のご都合が付きなかつたため、宇留野良子師範（瑞江鶴の会所属）にお願いしました。

左顧右眄～さこ・うべん～（59）

【第10話 百花繚乱の中国拳法——清朝末から民国時代へ——】 前号の続き

6) 八極拳

八極拳は、河北省滄州孟村の回族に伝わる非常に実戦的な拳法です。呉鐘（1712～1802）が癩と名乗る謎の拳士から習い、またその弟子の癖と称する人物からさらに槍術の秘伝も受けたとされています。呉鐘はその後、各地に武者修行に出かけて八極拳の名を上げ、自身も神槍呉鐘と呼ばれるようになったといわれています。したがって各地の回族や漢族の間で伝承され、多くの名人、達人を輩出しました。民国時代では河北省塩山県南良出身の李書文（1864～1934）が「二の打ちいらすの李」と呼ばれるほどの実戦派で、当時の軍閥の將軍などに請われて各地で教えていますが、その弟子としては河北省滄州孟村出身の劉雲樵（1909～1992）が有名です。滄州の名家に生れた劉雲樵は父親が招いた李書文に10歳のときから特訓を受け、20歳には師に同行して各地で他流試合を行い武名をあげたといわれています。不幸にして25歳のときに師が横死しますが、その後六合螻蛄拳を、また八卦掌をも習得しています。その後国民党政府の特殊工作員として抗日戦を戦いますが、戦争終結後の国共内戦を経て、1949年には国民党蒋介石軍にしたがって台湾に移っています。

台湾では蒋介石総統の護衛官を勤め、警備隊の武術教師も勤めました。彼と同様に大陸から移ってきた数多くの武術家たちを糾合して台湾武術界の組織化などに尽くしました。日本人の武術研究家松田隆智氏が台湾で彼から直接指導を受けた話はたいへん有名です。

八極拳の技法は敵に先んじて一瞬に踏み込んで震脚による強力な発勁で一撃で倒すという接近戦に長けたきわめて実戦的なものとして知られています。相次ぐ黄河の氾濫などで土地が痩せている滄州はむかしから武術、武芸で身を立てる人の多かったところですが、その伝承のひとつがこの八極拳でもあったというふうに解釈できます。また少数民族回族の自衛の武術でもあったのでしょう。孟村は現在でも「孟村回族自治県」として地図にも載っています。

7) その他の北派拳法

螻蛄拳、劈掛拳、三皇砲捶、地功拳など多数ありますが詳細は省略します。

8) 南派拳法

広東系の^{ほん}洪家拳、福建系の詠春拳、白鶴拳などが有名ですが、いずれも少林拳に由来するものと思われます。

詠春拳は少林寺の尼僧・方詠春が興したとされていて、ブルースリーの学んだ拳法とされています。白鶴拳もまた、方万娘が父から学んだ拳法に鶴の動作を取り入れて名づけた拳法で、現在では白鶴拳は台湾の最大門派となっています。

白鶴拳には面白いエピソードがあります。1954年のことですが、香港で呉式太極拳の第2代呉公儀(1900~1970)が「わが太極拳はボクシングとも戦える」と発言したのに対して、白鶴拳の若手拳士・陳克夫(当時30歳)が“私はボクシングも出来るので”と挑戦したのです。試合はマカオで「呉陳比武」と称されて、海外からも観客が多数集まったといえます。試合はボクシング方式で、つまりリングの上で5分5ラウンド制、けり技禁止というルールで素手で行われましたが、第2ラウンドの終わり近くに思わずけり技を応酬したため双方反則で引き分けとなったそうです。たまたまインターネットを検索していたら、この試合の動画(当時の映画フィルムと思われる)を観ることが出来ましたが、スピーディーな、しかも中国拳法らしいパンチと防御技の応酬で迫力満点でした。呉先生54歳の激闘振りが評価され、以後中国内外で呉式太極拳の名が大いに上がったそうですし、陳さんもこれが縁でアメリカやオーストラリアに渡り白鶴拳を広めたそうです。

9) まとめ

上述したように清朝末から民国時代は、大混乱と大変革の時代でした。権力者も次々に換わり、あるいは軍閥が跋扈し、内戦も、また対外的な紛争や戦争も起きました。つまり実戦的な武術に対するニーズのきわめて高い時代でもありました。世界に開かれた上海、天津、北京などでは欧米や日本の格闘家や武術者達との真剣勝負もあまたありました。上述した各流派の拳法の理論や技術はこうした中で、必然的に、研究されたり盗まれたり、流派も分裂したり統合したりしながら、より強いものへとそれぞれの発展の道を辿ってゆきました。それぞれの特徴はありますが、やはりすべてが「中国拳法」というカテゴリーに入るものであることは確かです。

剛直で必殺の突きを究極の拳法とするものもあり、あるいは柔をもって剛に克つと唱えるものもあります。発勁も真、化勁もまた真です。中国拳法としての奥行きと幅は無限にも思われます。

いずれも根本には中国思想の根幹である陰陽五行説や、道教、儒教、仏教、回教などの宗教思想をたくみに取り込んでいること、あるいは気功や経絡学説に準拠していることも特徴のひとつです。またこの混乱の時代にあっては、特定の宗教に直結したり、あるいは秘密結社の隠れ蓑や結束の象徴としての存在でもありました。共産党も、国民党もこれらの拳法の門派やその達人たちを積極的に利用しました。ここにも中国拳法の背負った時代の側面が窺われます。

21世紀の現在は、かつてのような「殺すか、殺されるか」の拳法は軍隊や警察を除いてはおおっぴらには出来ませんでしょうが、それでも「倒すか倒されるか」の拳を追求して日夜他流試合に励むグループや門派も多いと聞きますし、現にインターネットではそのような動画をたくさん見ることが出来ます。一方では、競技としての中国武術も政府の後押しでますます隆昌を極めていきます。また、健康法としての太極拳の存在も中国、日本を始め世界的な広がりを見せていますので、中国武術の中でも特異な地歩をしめていることも確かです。太極拳を含む中国武術の内包する深遠さは計り知れないものがあると思います。

旅をうたい拳を詠む トルコ紀行

4月20日から27日までG社主催のイスタンブールとカッパドキアだけを廻るツアーに参加してトルコへ旅行して来ました。この2箇所だけというコンパクトさが気に入って選んだツアーで、総勢12人の小人

数でゆっくり仲良く楽しい旅となりました。旅の印象を短歌と写真でご紹介します。

4月20日(金) 成田発～イスタンブール着 約12時間 【イスタンブール泊】

夜を擬し機窓を閉じしキャビンごと

異郷の地へと運ばれてゆく

絹の道辿りて行けば幾年を

12時間でアジアのはてへ

4月21日(土) イスタンブール発～ネヴシェヒル着

約1時間15分(4月23日までカッパドキア滞在)

褐色の荒野の果てにすくと立つ

エルジェス山なお雪を冠りて(標高3950mの高山)

文明の十字路などと呼ばれるは

軍馬も繁く行き交いし故

身を屈めひたすら下る地下の道

邪宗の軍に追われしごとくに(地下都市)

地に潜み神に祈りて暮らしぬし

民の残せし手掘りの隧道(地下都市)

漆黒の大地の上の天穹は煌めきさざめく星の饗宴

丘の灯と見誤りしは木星の

まばゆきばかりの輝きと知る

薄明のギョレメの谷より次々と

湧くがごとくに気球は飛び立つ

いつしかにバルーンの群れも飛び去りて

異形の谷はしじまに戻れり



【写真上・左；いずれもカッパドキアの風景】

4月23日(月) ネヴシェヒル発～イスタンブール着 約1時間15分

(4月26日までイスタンブール滞在、26日夜行便でイスタンブール発、27日朝成田帰着)

ヨーグルト、チューリップまたキオスクは

いずれもトルコが発祥と知る

回廊をぐるり巡ればガラタ塔こちらは欧州あちらはアジア

ペラパレスの“Agatha”とふ名の餐室の話題はなぜか殺人事件

今朝もまた晴れわたりたる海峡をウシュクダラへのフェリーが行き交う

この国の国旗の図柄の三日月をガラタ橋にて見上げる良夜
海峡の向こうに連なる街の灯を時より船が暗く遮る
対岸のウシュクダラの灯眺めつつ

ひやくげんきん
百弦琴聴くチュラーンパレスで



そこここを赤く彩る
ほなずおう
花蘇芳は“ユダの木”
なりと言われて戸惑う

アヤソフィアとブルー
モスクは向きあいて国
の興亡語りあるらし



トプカピの宝物殿にて再会す86カラットの大ダイヤモンドに
40年前にタイムスリップしたごとし

あの聖堂もこの海峡も

現地紙に“Japan”の文字は皆無なり

ここから見れば日本はさいはて

× × ×

ほぼ40年ぶりのトルコでしたが、イスタンブールの
モスクやボスボラス海峡や金角湾の風情は全く変わる
ことなく、街中に咲き乱れるチューリップとともに私
を迎えてくれました。トルコ料理もいろいろと味わう
ことが出来ました。デザートは甘くておいしいお菓



子の類にはちょっと困りました。トルコはたい
へん歴史の古い国で、幾多の国や民族が入れ替
わり立ち代りにこの地を支配しました。

宗教もキリスト教、ギリシャ正教、イスラム教
とさまざまな変遷がありました。文明の十字路
と呼ばれる由縁です。人種的にもいろいろな血
が混じっているようで、いわゆる“トルコ美人”



が多いことをあらためて実感した旅でもありました。

【写真；上より、①ホテルよりボスボラス海峡と対
岸のウシュクダラを見る②アガサレストランのスイ
ーツ③ユダの木④正面右はアヤソフィア、左奥はトプ
カピ宮殿⑤ブルーモスク】